

いつみきいちょう 逸身喜一郎著「ラテン語のはなし—^{つうどく}通読できるラテン語^{ごぶんぽう}文法—」(2)、大修館書店、2000 年 12 月 15 日刊を読む

ゆえに我あり——英語でいえばbe動詞

1. cogito, ergo sum.

我、考える、ゆえに我あり。

——デカルト

2. デカルトのことば「我、考える、ゆえに我あり」は、パスカルの「人間は考える葦である」と並んで、たいていの人が知っている。何とはなしにわかったような気にさせられることばであるが、もとのことばに戻してよく見ると、ずいぶん奇妙な表現である。

3. ラテン語の sum はあとで詳しく説明するが、これだけで英語の I am に相当する。だから sum にはそのあとに続くことばがなくてはならない。たとえ名詞や形容詞といった狭義の補語ではないにしろ、場所を表す字句のようなものが、なにかしら必要である。もしそうしたことばのない表現があったなら、それは省略されているのであり、補おうとすれば必ず文脈から補える。

4. ところがデカルトの

cogito, ergo sum. すなわち I think, therefore I am.

の sum はまさにむき出しである。

5. どうも日本では、哲学者を別にして、この文章をあまり深く論理的に追求せず、ただ気分的に受け入れているようである。私自身、もともと哲学は不勉強だし、どうも体質的に合わないといって逃げているので偉そうなことはいえないのだが、少しはことばに沿ってこの文章のできあがり方を想像してみると、次のようなことになる。

6. ギリシャの昔から「〇〇とは何であるか？」という問いが、しばしば発せられてきた。〇〇にあたるのは、あらゆるもの、一切合切である。

7. 自明なもののようにありながら、いざ問われてみるとわからない事柄が実に多い。「水とは何であるか？」「太陽とは何であるか？」「世界とは何であるか？」「勇気とは何であるか？」「国家とは何であるか？」「時間とは何であるか？」「人間とは何であるか？」。そして人間にとってやはり相当に(いちばんといえるかどうかは別として)関心のあるものが「命とは(いいかえれば死とは)何であるか？」であり、さらには「自分とは何であるか？」である。

8. その一方で、こうした問いに答えようとしたときにすぐ気づかされるのが「『何であるか』と問うこと、それ自体はいったいどういうことなのか？」ということである。問いそのものが問いになる。今日の世間の関心事から例をひけば、自然科学的に、たとえば「老化とはかくかくしかじかで

ある」と答えるのと、同じ問いであっても社会生活の枠組みの中で答えるのとでは、相当に違った答えになる。実は日常生活の中では、問いが発せられたときには、すでに答えならずとも、答えの形式を予想しているのである。

9. そしてもうひとつ、ここで日本語とヨーロッパ語の、ある意味で重大な違いが露呈してしまうことになるのだが、ヨーロッパ語の場合には、『～である』とはどういうことか？」という、もう一段、次元の違う問いが、かなり簡単に生じてくる。「〇〇とは何であるか？」を英語でいうと **What is 〇〇?**になるが、ここには「動詞」の **is** がある。つまり〇〇を埋めようとして始まった問いは、何？(What?)そのものを問うことを経て、最後に **is** を問うにいたる。この **is** がどうしても気にかかる対象になってしまう。「**is** とは何か？」**is** は他の動詞と違って、説明しがたい。

10. ところが日本語では「〇〇とは何であるか」という問いを普通の表現に変えて、「〇〇とは何か」にすればすぐわかるように、**is** なしに問いは発しうる。第一、**is** にあたる動詞がない。

11. そしてかりに **I am** ～という形式にあてはまる文章を考えれば、

I am John.

I am a man.

I am a teacher.

I am Japanese.

I am alive.

I am mortal.

I am fifty years old.

I am 170 cm tall.

I am Mary's husband.

I am a member of the Royal Society.

I am poor.

I am in bed.

I am here at the main gate now.

I am of no use.

と果てしなくあてはまることばは見つかる。ところがこれらを日本語に訳そうとすると、同じ形式に統一して訳せない。「私は～である」という構文にはのらないものがいくつも見つかる。

12. 一方、日本語と違ってヨーロッパ諸言語では、こうした文章はみな、**I am** ～でいえてしまう。しかしながらそれと同時にこういう文章をいくら重ねてみても「では私とは何なのか？ **What am I?**」、より厳密に言えば「**I am** とは何なのか？」という問いに答えきっていない、との思いはつきまとう。文法的に言えば **I am** だけでは文章は完成しない。必ず **I am** のうしろに(上で列挙したような広義の)「補語」がなくてはならない。にもかかわらず何を補語に入れてみても、「**I am** とは何なのか？」の思いは解決しない。

13. そこでデカルトはこう考えた(と私、逸身は思う)。私はいま、現に考えている(**cogito** とは<私は

考える>の意味の動詞の 1 人称単数形である)。それが「私とは何なのか?」という問いに先だっている(考えたからこそ問いは出てきた)。「私とは何であるか?」に答えれば「私とは考えているものだ」となろうが、しかしそれはそもそも私が考えているから生じる問いであり、答えなのである。

14. よってこの文章は vivo, ergo cogito. 「私は生きている、ゆえに私は考える」という、常識人の文章とは根本的に違っている(vivo とは<私は生きている>を意味する動詞の 1 人称単数形)。そして憎まれ口をたたけば、常識人の文章は文法どおりにできあがっているのだが、哲学者の文章は往々にしてよくいえば破格、悪くいえば自分勝手である。

15. 以上が長い長い前置きで、これからラテン語の話となる。

16. 前回、ラテン語の動詞、厳密に言えば動詞の現在形は、4 つのタイプに区分されると述べた。しかしごく一部、例外がある。例外中の例外が、英語でいうところの be 動詞である。

17. 1 人称単数が sum であったが、他の人称ならびに複数もあわせ全体を並べると下表ができる。

・ 不規則動詞：sum の現在

	単 数	複 数
1 人称	sum	sumus
2 人称	es	estis
3 人称	est	sunt

18. 一見して不規則な姿をしていることが読みとれる。けれどもよくよく見れば、1 人称の単数・複数および 3 人称複数の 3 カ所では su- という形が含まれている。そして -mus とか -nt という語尾は、規則動詞と共通している。一方、その他の 3 つの形(2 人称単数、3 人称単数、2 人称複数)はどれも es で始まっている。

19. もしフランス語をご存じなら、フランス語の être が

	単 数	複 数
1 人称	je suis	nous sommes
2 人称	tu es	vous êtes
3 人称	il est	ils sont

と、もとのラテン語の形を綴りのうえでよく残していることは、一目瞭然であろう。

20. 不定詞もまた異形である。to be のラテン語に相当する形は esse となる。

21. <本質>と訳す英語の essence はラテン語の essentia からできているが、その essentia とは『何であるか?』という問いに過不足なくあてはまる答え(あえて奇妙ないいかたをすれば『何であるか』性)、とでもいうべきものであって、esse そのものからできている。この essentia という単語はギリシャ語の οὐσία(「ウーシア」と発音する。この語にはギリシャ語の be 動詞の語幹のひ

とつが入っている)を翻訳するために、セネカのいうところではキケロが造語した、と伝えられている(異伝もある)。

22. *sum* にはいくつか派生語がある。たとえば英語の *absent* のもとになった *absum* も、*present* のもとの *praesum* もそうであるが、とりわけ重要なものがひとつある。*possum* である。これは動詞の不定詞をとって<～することができる>を意味する。これについては第 16 課であらためてとりあげることにする。

P53 ~ 58

[コメント]

デカルトの「我思う、故に我在り」をどう考えるのか。逸身先生の「ラテン語のはなし」は興味が尽きない。

— 2014 年 1 月 10 日 林 明夫記 —